

## 混乱に隠されている魔物

運転に不安のある人考えてほしい。

寿命尽きるまで一緒にいると信じていた。

悲痛な叫び声です。どんな慰めの言葉も虚しい、喪失感に襲われておられるご遺族の方々に、立ち直る力を与えてくださるよう祈ります。

陸海空ともに運転にかかる事故は増え続けています。高齢化だけが原因ではありません。過労、過密、過激、過干渉という現代文化の中に潜んでいる何か不気味なものが関連しているように感じられます。コンビニは近代文明の究極の形であると私は考えていますが、便利さを手に入れた私たちは、その便利さを作り出している陰に隠れた不気味な要因を放置しているように思います。

(1)過労、過密、過激、過干渉がもたらす不気味な心的な要因の一つに混乱があります。混乱とは整理がつかなくなり狼狽すること。入り乱れて秩序をなくすこと等が辞書的な意味ですが、情報量が多すぎて選択に迷うのも混乱の一種です。混乱すると人はどうするのでしょうか。一つは我慢して何もしない。一つは何でもいい間近なことに手を出す、足を出します。「何もしない」場合と、「何かをしてしまう」という両極端があります

(2)何もしない人に対して「優先順位がつけられない」とは、よく職場で言われる言葉ですが、指示命令系統が複雑になると「何もできなくなる」ことがあります。何故しないのかと問われても本人にも分からない。ただ、謝るのみ。誤っている本人にも原因がわからないから、繰り返す。人は混乱すると「何もできなくなる」のです。

(3)理性が働いて「何もしない」というのは賢い一つの選択です。考える余裕＝時間がある場合に可能なことです。問題は「何かをしてしまう」方にあります。

「何かをしてしまう」のは、ともかくこの混乱状態から脱する為に、何かをしなければならい、という情動が働いて一番近くにある何でもいいものに手を出してしまう、足を出してしまう。良し悪を考える暇がなくなっています。

(4)「何もしない」事例を考えてみました。幼児期に一番混乱するのは、両親の喧嘩です。派手になればなるほど子供は恐怖を感じますが、どうしていいかわかりません。どちらに味方していいかもわかりません。ただひたすら、はやく終わったほしいと膝小僧を抱えて待っています。「何もできない」から「何もしない」。これを繰り返し体験すると、混乱状態を必要以上に感じて、何もしない子になって、そのまま成長すると、職場で優先順位のつけられない人になってしまいます。

(5)上司は「君は優先順位が判断できないのか」と叱られても「はい、分かっています」と答えながら、あいかわらず、「何もしない」が改まらない。上司の指示通り動かないから、上司は自分が無視されたと感じて、さらにひどく叱る、怒鳴る。部下は、今度は恐怖が加わってくるから、それを避けるためには「何かをしなければならない」

(6)混乱した中で、何かをしなければ、又叱られるという恐怖を持っていると、そこから脱するために、考えもなく「一番身近なものに手を出してしまう」それがとんでもない結果になってしまう。「考えもなく、とにかく、何かをしなければ怒られる」という情動が働いて刺激に反応してしまう、と私は自分の体験から考えています。

(7)混乱すると、理性の働きが鈍くなるか、又は、働かなくなる。整理能力が働かない。加齢は、否応なく混乱の度合いを増す。瞬発力が著しく劣ってくる。「運転に不安のある人考えてほしい」被害を受けられた方の叫びに、謙虚に応えられなだろうか。「応えられない」が多数意見です。車がないと生活できない文化になっています。

(8)高齢者の運転機会は増加する一方です。アクセルとブレーキの踏み間違えは、自動車に限らず、いろんな生活の場面で日常茶飯事に起きています。踏み違い現象が増幅し、計画的な犯罪にも発展しています。計画を正当化する瞬間に理性の判断能力、倫理観が破壊されてしまいます。尊い命が理不尽に奪われる事件が増えています。これを無くすには長い時間が必要かもしれません。

(9)私は60歳で運転免許証を返上し、70歳で職業上必要な免許を返上しました。理由は「もうこれ以上に他人に迷惑をかけたくない」という心情又は情動でした。何度も事故を起こしました。他人を傷つければ、それ以上に自分が傷つくという自己本位の考えからくる自己防衛です。非難されましたが、「～～～～に不安のある人は、考えてほしい」この切実な思いが胸にしみ込んできます。

(10)しかし、人はそれぞれに違った環境で生活していますから、私はそれを他人に強制することはしていません。「便利さ」という近代文明の極致を味わった私たちが「不便」に向かって生活することは大変困難なことです。コンビニが24時間営業をやめられないのは、目先の利益だけではなく日本の文化にコンビニが定着したためだと考えています。

「不便」さに向かうには、何がしかの「諦め」が必要です。便利なものの何かを「捨てる」必要があります。「捨てる」のは怖いです。その恐怖を乗り越えたところに本当の自由があるように感じて、山の中の生活を楽しんでいます。

## やっぱりコミュニケーションは大切 幸せの要はコミュニケーション

(1)あの人、「伝える」言葉を「伝わる」かたちにする名人でした。

伝えたつもりが伝わっていないことがある。放送作家・作詞家の永六輔は、とくに思いをこめること、市井で耳にした大事なことを伝える時は、逆に丁寧に「笑いをまぶして」いたと、彼の本を手がけた元編集者は言う。教育もきつと同じ。教え育てることよりも、そこにいれば子供が勝手に育つような大（おお）らかな場所を用意しておくことが先だろう。

この言葉は（井上一夫著）『伝える人、永六輔』から鷲田清一さんが引用され、解説をつけておられます。朝日新聞朝刊第一面を飾る「折々のことば」（1442）より。

アンダーラインは私が引きました。おおらかな場所、今では難しいかと思っていましたら、昨日近くのオンリー湯に行きましたら、4歳の男児がお父さんと楽しい会話を始めました。私は「僕は何歳ですか」と問うと、その坊やは「僕は4歳、お姉ちゃんは6歳、ママと一緒にだよ」と話してくれました。この家庭には、おおらかな場所があるのだなあと感じ、健やかに伸び伸びと大きくなれと祈りました。

(2)何を言っているかではなく、その人間が何を聞き取る人間であるのかを注視していれば間違える確率は少ない。

医師、教員、そして何より政治家。世間でセンセーと呼ばれる人たちから昨今、どんどん削がれてきたのが、「聞き取る」ことへの能力、この意志ではないか。この人がほうんとうに心配していること、知りたがっていることが何かを見定めることが、恋愛にあっても、選挙にあっても肝要。

この言葉は（平川克美さんのツイッター）から鷲田清一さんが引用され、解説をつけておられます。朝日新聞朝刊第一面を飾る「折々のことば」（75）より。

リーダーの役割の一番は聞き取ること。私がそれを学んだのは「モモ」（ミヒヤエル・エンデ著）からです。今も聞くことに力を入れています、聞き上手になると相手の虚も垣間見れます。それを指摘しては元も子ありませんから、聞き流しています。政治家は選挙の時には猫なで声で投票を訴えるだけの人が多勢です。だから投票率が下がる一方です。選挙制度も悪いですが。

(3)いかにして、われわれが自分を幸福にすべきかではなく、  
いかにして、われわれが幸福に値するものとなるべきか、という教え

道徳とは元来そういうものだと、哲学者は言う。幸福を願うのではなく、自分が幸福を得るに十分な道徳的な人間であるかを先に問えと。なかなかに厳しい言葉だが、幸福と見えるものがえてして、欲望という、自分でも制御できないものに翻弄されている不自由な状態であると、論している。

この言葉は（イマニュエル・カントの実践理性批判にある言葉）から鷲田清一さんが引用され、解説をつけておられます。朝日新聞朝刊第一面を飾る「折々のことば」（1278）より。

欲望とは実に厄介なものです。もっと便利に。もっと、もっと。登り着いたところにあったものは、何であったか。それは人間を支配する魔物ではなかったか。と私は感じています。そして、それに支配されている自分も例外ではなかった。これからどうすべきか。更に捨てるものを増やさなくてはならない。ベストピアも！

私にとって大きな葬儀が続いています。その最後のお別れを病室で対面するのは辛いです。

葬儀は、その人の生きた証を、牧師に解き明かして頂きますから、癒されます。

日々近くなる自分の葬儀に備えて生きたいと思います。「主よみもとに近づかん」の賛美歌は深く胸に迫りました。